Vol.337

2025.12.22

『第19回健育会グループ チーム医療症例・事例検討会in熱川』を開催しました

医療法人社団 健育会　理事長 竹川 節男

2025年12月６日(土)、みしまプラザホテルにて『第19回健育会グループ　チーム医療症例・事例検討会』を開催しました。健育会グループの病院・施設から合わせて19題の発表が行われました。

第19回目を迎える「チーム医療症例・事例検討会」が、みしまプラザホテルにて開催されました。症例発表は、前半は介護施設部門から10題、後半は病院部門から9題の症例発表が行われ、それぞれ質疑応答と座長による講評が行われました。

はじめに、私から皆さんへ開会の挨拶として映像メッセージを贈りました。

「チーム医療症例・事例検討会」は、今年で第19回目を迎えます。
回を重ねるごとに、健育会グループが大切にしているチーム医療やOur Teamでの取り組みが深く浸透していると実感しています。抄録からも患者さんやご利用者の笑顔のために、職員全員で知恵を出し合っている様子が伝わってきます。
今年は、患者さん、ご利用者の幸せホルモンを高める症例発表も予定されています。
ナースやセラピストは、温かな声かけやタッチングなどの触れ合いを通じて安心感を与え、医師は丁寧な接遇によって信頼関係を構築し、オキシトシンを高めてくれます。
また、幸せホルモンを促進させるためには、職員の皆さん自身が仕事へのやりがいを持つことが不可欠です。そのためには、「安全」で「経営」が安定した安心できる職場環境が求められます。
「安全」、「経営」、そして「愛情を持って親身な対応」。この順番をしっかりと意識しながら、やりがいを持って、患者さんやご利用者と接するよう努めてください。

私の挨拶の後、順天堂大学医学部附属静岡病院　副院長の藤田和彦先生による「排尿障害の診断と治療および最近の泌尿器科における課題 ～チームで取り組む泌尿器診療の現状と展望～」と題した講演が行われました。

本日は排尿障害の診断と治療についてお話しさせていただきます。

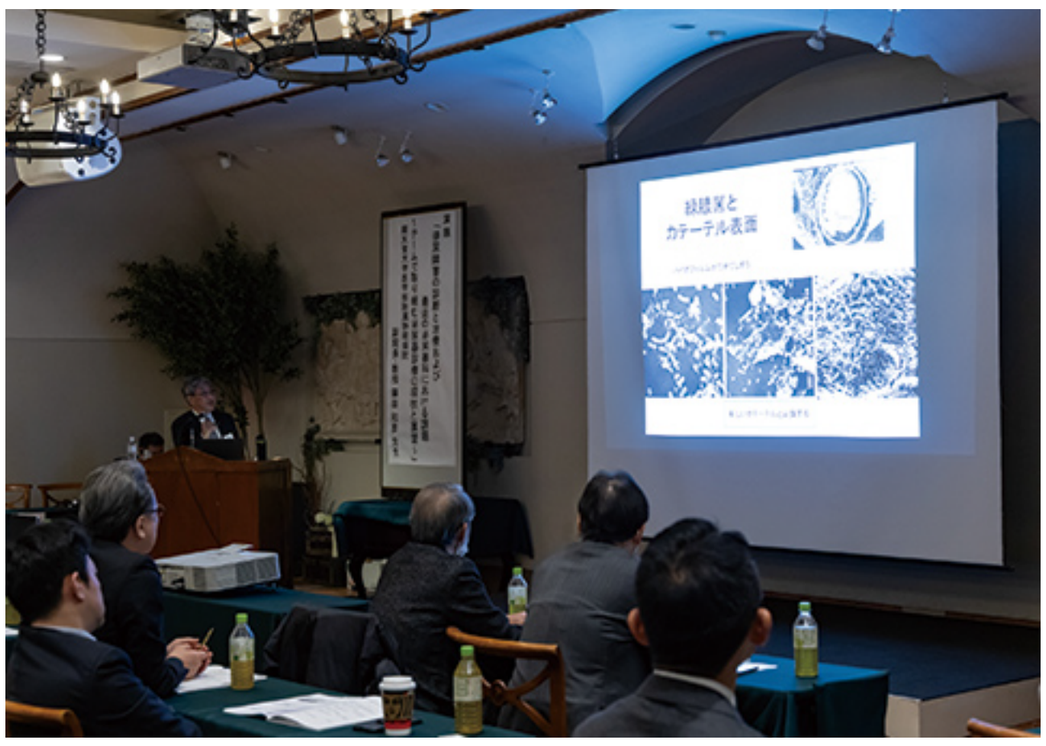
排尿障害の主な原因は、前立腺肥大症による尿道狭窄と、膀胱の収縮力低下の二つです。

診断では、尿流量検査とともに残尿量の測定が最も重要で、100cc以下が望ましい基準です。残尿が多いと、頻尿や尿路感染症、さらには腎機能障害のリスクが高まります。

前立腺肥大症の治療は、アルファブロッカーによる尿道拡張と、画期的な薬であるアボルブによる前立腺縮小が基本です。頻尿にはベータ3刺激薬が有効ですが、残尿増加や便秘の副作用に注意が必要です。また、ザルティアは排尿・蓄尿症状の両方に効果的ですが、ニトログリセリン使用者には禁忌であるため必ず確認をしてください。

女性の排尿障害には、薬物療法よりも骨盤底筋体操が最も効果的です。

残尿による尿閉は、放置すると生命に関わる危険な状態になります。カテーテル留置は避けられませんが、感染リスクを避けるためにも、間欠的自己導尿への移行が望ましいです。



自己導尿を促す上で大切なことは、患者さんがトイレを自立して行えるか把握をしておくことです。認知機能や聴覚は正常か、どのような姿勢で行っているかなど、患者さんの状態を医師はもちろん、理学療法士や言語聴覚士、作業療法士など、全員で協力して把握する必要性があります。

学会の所定の研修を受け、理学療法士や作業療法士などを含めた排尿ケアチームを作り、チームとしてアプローチしていくことも必要になっていくでしょう。

また、患者さんが様々な薬を服用している場合、どの薬がどのように効力を表しているのかを把握しきれない医師も存在します。処方される薬が正しく作用するかの判断は、薬剤師とのコミュニケーションがしっかりと確立していれば問題なく行われます。

様々な職種による多方面からの視点で、患者さんをしっかりと見守り、正しい判断を下せるようチーム一丸となって医療提供をすることが重要です。多職種での連携を強化し、患者さんのためを思い、負担の少ない医療提供を行う意識付けをしてほしいと思います。

その後お昼休憩を挟み、介護施設部門の症例発表が10題行われました。座長は淑徳大学短期大学部名誉教授、亀山幸吉先生が務められました。
健育会グループのご利用者がその人らしく輝けるような支援や、幸せホルモンを生み出した事例の発表が行われました。

症例発表《前半》

1

「子どものチカラは無限大」～キラキラ輝く笑顔～
ひまわり在宅サポートグループ
仙台ひまわり訪問看護ステーション
理学療法士　新田　友哉

2

褥瘡を越えて ～QOLを支える連携の力～
介護付有料老人ホーム　ライフケアガーデン湘南
看護師　溝手　恵理子

3

また二人で暮らせる日々を夢見て
介護老人保健施設　しおん
介護士　阿部　小百合

4

円背の方へのポジショニング
～睡眠支援からQOLの向上へ～
特別養護老人ホーム　ケアポート板橋
介護福祉士　稲垣　卓美

5

本人らしさや希望を支援の核に据え、
拒否改善と生活の質向上に繋がった症例

介護老人保健施設　しおさい

介護福祉士　森　竜太

6

心に残るひとときをもう一度
～喫茶コーナーと思い出メニューの取り組み～

介護付有料老人ホーム　ライフケアガーデン熱川

理学療法士　杉山　潤一

7

ふるさとめぐり　日本列島ご当地ツアー!

介護老人保健施設　ライフサポートひなた

介護福祉士　神品　清香

8

レクリエーションにおける幸せホルモンの上昇

医療法人喬成会　介護事業部

看護師　高島　太朗

9

ドパっと! 桜満開大作戦

介護老人保健施設　ライフサポートねりま

介護福祉士　増山　友惟

10

継続は力なり! 毎日笑って楽しい暮らしをⅡ
～幸せホルモン～

ケアセンターけやき

ケアワーカー　相馬　康一

前半の発表を終えて、亀山先生から講評をいただきました。

１：ひまわり在宅サポートグループ　仙台ひまわり訪問介護ステーション
難易度の高い難病児へのチームアプローチであり、高く評価されるべきだと感じました。私たちが大切にする理念や思想、そして日々の実践のあり方を深く振り返る貴重な機会となりました。

２：介護付有料老人ホーム　ライフケアガーデン湘南
ベッドでの生活を余儀なくされているご利用者に対し、ご本人の痛みや身体的な部分はもちろん、精神的な側面に深く寄り添い、その喜びを分かち合えるようなケアを、引き続き目指してください。

３：介護老人保健施設　しおん
今回のテーマを通じて、老健施設の使命について改めて深く考える機会を得られました。老健施設独自の専門的な視点と充実したリハビリテーションを活かし、今後も地域における生活支援を追求してください。

４：特別養護老人ホーム　ケアポート板橋
どのような状態が質の高い睡眠をもたらすかは、個人によって大きく異なるという点を深く認識する必要があると感じました。ご利用者一人ひとりの状況に合わせたアセスメントやケアプランニングを、今一度慎重に見直していく必要があると感じます。

５：介護老人保健施設　しおさい
「援助とは何か」という本質や、ご利用者やご家族との間に揺るぎない信頼関係を結ぶために、日々の関わりの中でどのような積み重ねが必要なのかを、改めて考えていきたいと感じました。

６：介護付有料老人ホーム　ライフケアガーデン熱川
日本国内にも、居酒屋と連携して共同でお酒の提供を行っている施設や、作物を育てながら生きがいを生み出す障害者施設などがあります。幸せホルモンを生み出すアプローチを、今後も積極的に行っていただきたいと思います。

７：介護老人保健施設　ライフサポートひなた
他の施設でもすぐに取り組み、展開できる実用性の高いものだと感じました。今後は、外部のボランティアなども含め、地域共生をしっかりと受け入れた上で、更なる発展を遂げていくことを期待しています。

８：医療法人喬成会　介護事業部
地域との交流や外食の提案など、事故や不穏状態を防ぎながら、工夫を凝らして社会的交流の機会の減少を克服した、非常に重要な実践でした。他の施設でも広く実践していただきたいと感じます。

９：介護老人保健施設　ライフサポートねりま
生活リズムの単調さを打破し、ご利用者に達成感を抱かせるという点で、大変優れた良い事例だと感じました。グループ内ですぐに取り入れられるよう共有し、活動範囲をさらに広げていくことを期待します。

10：ケアセンターけやき
いくつか課題もあるようですが、前向きに取り組まれている姿勢が強く窺えました。ご利用者は、スタッフが笑顔で仕事をしているかをよく見ていらっしゃいますので、笑いヨガをスタッフも活用し、良い表情で活動する意識付けを行ってください。

後半は、病院部門より９題の症例発表が行われました。座長は熱川温泉病院の田所康之院長に務めていただきました。

多職種で行った取り組みの症例や、前半同様幸せホルモンを生み出した事例の発表が行われました。

症例発表《後半》

1

高齢脳卒中患者の独居生活に向けた支援：ビジネスチャットツールを活用したシームレスなチームアプローチ

湘南慶育病院

作業療法士　姫田　大樹

2

超高齢のCOPD患者のこれからとその人らしさを支える関わり

竹川病院

看護師　中村渠　果帆

3

「自己効力感を高める関わりとは」～入院中のイベント参加を通じて～

花川病院

社会福祉士　冨居　潤一

4

心肺停止状態から社会復帰まで、チームで繋いだ命のバトン～怒濤の反復で身に付けた急変時初動対応～

西伊豆健育会病院

看護師　永原　美里

5

「食べること」「家族と過ごすこと」に寄り添った多職種協働の一症例 ～両側中足骨頭切断術後・COVID-19肺炎を合併した患者の回復過程～

熱川温泉病院

理学療法士　平井　竜大

6

タッチングがポジティブ感情に与える影響について

いわき湯本病院

看護師　阿部　絵美

7

回復期リハビリテーション病棟における化粧やスキンケア等の整容動作充実に向けた取り組みとその効果の検証

ねりま健育会病院

作業療法士　平山　美里

8

愛情を持って親身な対応における患者の主観的・客観的幸福度の向上

石巻健育会病院

理学療法士　津田　佳代

9

いきいき体操でハッピー気分!

石川島記念病院

看護師　弓田　純子

後半の発表を終えて、田所院長から講評をいただきました。

回を重ねるごとに、Our Teamでの取り組みがより深く浸透していると強く感じました。更なる成長を遂げるためには、チーム内での話し合いの機会を増やし、互いに意見を出し合いながら明確な目標を定めること、そしてチーム全体でその目標に向かっていくことが不可欠です。

幸せホルモンに関する症例発表では、患者さんの肌に触れるタッチングに関する演題が2題ありました。タッチングは、患者さんやご利用者との信頼関係が十分に構築されていない場合、不快感を抱かれてしまう可能性も考えられます。

日々の何気ない日常会話からも信頼関係は培われていきます。患者さんやご利用者との関係性を密にし、心から安心していただけるような信頼関係の構築を目指していただきたいと思います。

症例発表会の最後は、熱川温泉病院の佐野良一マネージングディレクターより「症例発表の結果をそれぞれの病院で活かし、健育会グループ一丸となって取り組んでいきたい」という閉会の挨拶で幕を閉じました。

発表会の後には参加者全員で懇談会が行われました。
来年度より熱川温泉病院の院長を務める藤田和彦先生による乾杯の挨拶が行われ、職員は本日の講演や発表の振り返りをしながら親睦を深めました。

その後、今回主催した熱川温泉病院の田所康之院長から、次回の主催を引き継ぐいわき湯本病院の小針正人院長へ成功の鍵の受け渡しが行われました。

最後に、大西証史顧問より、日々努力を積み重ねている健育会グループの更なる発展を願う、といったメッセージの後、会が締めくくられました。

愛情を持って親身な対応をすることで、身体の回復はもちろん、自己効力感を高めるといった精神的な部分への効果が増した事例も多く見られました。
今後も、患者さんやご利用者の気持ちに深く寄り添い、Our Teamで親身な対応を実践することで、全職員が幸せホルモンを生み出せるような素晴らしい活躍ができることを期待しています。

例検討会in熱川

第19
チーム医療